

## 編集後記

前回、2015年に編集後記を書いてから、早くも約2年が経過しました。2年経つと、皆様の周りも、様々な状況が劇的に変化しているのではないのでしょうか。

前回の自分の編集後記を読み返してみると、なんと「小児循環器学会雑誌のデジタル化が何よりの革新的変化です。」と書いてあります。今はデジタル化した学会雑誌が当然のものとして皆様に活用頂いていて、紙媒体のみだった時代は、遙か昔であるかのように感じられます。

そしてさらに1年間遡り、3年前の紙媒体の小児循環器学会雑誌 2014年第3巻を見ました。そうすると、自分が書いた編集後記で「さて、いよいよ本誌も英文誌化へ向かう可能性が討議され始めました」、「どの様な形式になるか、全く未定です。」とあり、時間の流れを深く感じた次第です。

今年の小児循環器学会雑誌の新しい変化は、何と言っても英文誌創刊です。まず数年前に、編集委員会内部で、英文誌が必要か否かの議論から始まり、学会および学会雑誌の未来を考えた時に、英文誌の存在は欠かせないとの結論に至りました。その後原著論文の投稿数や査読の方法など、様々な不安を抱えながら、英文誌作成に向け活動が開始され、今回無事発刊されました。当英文誌も2年後には昔から存在したかの如く、当然のものとして受け入れられているのでしょうか。4年後にはPubMedに載っていて、6年後にはImpact factorを得ていて、あたかもそれが当然のこととして受け入れられているのか、等とその先々の発展を想像してしまいます。

今後2年間で学会および学会雑誌はどのように発展しているのか、自分が書くことになるか否かはわかりませんが、2年後の編集後記に何が書かれるかがとても楽しみです。

(高橋 健)